キェルケゴールの魅力
―信仰を支える逆説弁証法―

山下　秀智

大会シンポジウムにおいては、私の体験も絡めながら、必然性と自由の弁証法的な構造について話した。それは私の親鸞への関心とも密接に関係しており、特に『歎異抄』の宿業の問題と直結したテーマだったからである。キェルケゴールの必然性概念は、いくつかの段階を経て深められていくが、最終的には、自由と必然性が弁証法的に矛盾・相即したものとして考察されるようになる。『死に至る病』では必然性は「限界」（Grændse）と呼ばれ、*1 人は、この限界において、最早一切の可能性も見出せない程の必然性の絶望に陥り、それにも拘らず、この必然性を背負いつつ、神にとって一切は可能であると決断するところに、信仰の可能性が開けるとされる。ここでは、必然性は、逆説的・宗教的なものの生成に不可欠なものとして、位置づけられるのである。

今回、大会報告のレジュメを作るに当たって、以上の自由と必然性の関係を、もう少し広げて、信仰を支える逆説弁証法ということで、まとめておきたい。若干のテーマに沿って報告する。

1　神 - 人の逆説

キェルケゴールは、絶対者の存在を、ヘーゲルのように絶対知の体系に止揚しようとはしなかった。ヘーゲルは、矛盾を止揚する弁証法論理を駆使して、相対的な知の立場が、対立する知の立場を包括しつつ、絶対知にまで高まる体系を構築しようとし、その絶対知こそが、哲学の課題であり、使命であると考えた。その際には、哲学史は言うに及ばず、世界史までも下敷きにして、壮大な体系が構築された事は周知の通りである。しかしこの弁証法については、た

*1 SV3, 15, S. 94

だちにフォイエルバッハやマルクス、キェルケゴールが反対を表明した。その理由は、ヘーゲルが止揚した対立・矛盾が、いわば頭の中で処理できるもの、理性で整理できるものであって、真に現実的なものではないからである。マルクス主義では、この現実的なものが、社会的・政治的矛盾として、労働者階級と資本家階級の対立として置かれ、その止揚がどのように為されるかが問題となった。一方、キェルケゴールでは、人間が抱える具体的、現実的な不安や絶望、そしてその救済が問題となった。

キェルケゴールは、神と人間の間には、質的な差異が存し、その差異を理性によって埋めることは不可能であると考えた。むしろ、理性の働きそのものを挫折、粉砕するものが神 - 人の逆説なのである。「神と人間は、その間に無限の質的 - 差異の存する二つの質である。この差異を見逃すところの全ての教説は、人間的にいえば狂気であり、神的に解されれば、神の冒瀆である。異教においては、人間は神を人間と為した（人間 - 神）、キリスト教においては、神が自らを人間と為すのだ（神 - 人間）。」*2 神が人となったという逆説は、真理認識の可能性という問題として、ソクラテスとキリストの違いを中心に据えながら、『哲学的断片』の中で、詳細に、しかし最も抽象的に論じられている。ソクラテス的想起と違って、キリスト教の真理認識は、質的相違を前提にするから、その認識の「瞬間」は決定的な意義をもつことになる。又、質的差異を超えるのは、絶対者の方からであり、それが「愛」であり、卑しい下僕の姿でキリストが現れた理由であり、さらには、逆説と悟性の逆説的・情熱的な出会いが「信仰」と定義されている。信仰は神の働きとの出会いであり、そこに『死に至る病』の「精神」や「自己」といった人間観の基礎も据えられている。キェルケゴールの弁証法は、ヘーゲルのように、いわば概念が概念を生みつつ展開するのではなく（それをキェルケゴールは、あくことなく揶揄した）、実存の現実性に基づいた諸概念間の首尾一貫した、有機的な実存概念宇宙の形成にあった。これら諸概念は、概念である以上、最早現実性そのものを掬い取ったものではない。あくまでも現実そのものは、単独者が生きるものであって、その生きた実存運動を、学問は捉え切ることは出来ないのである。今回シンポ

*2 SV. 3, 6, S. 15

ジウムにおいて、キェルケゴールの魅力について、そのアンチ哲学が問題となったのも、当然のことなのである。

2 宗教的実存

「キリスト教的には、苦悩はこの人生における継続的な構成要素（付随するもの、det bestandigt Medtilhørende）である。もし、苦悩が消失すれば、それは目出度し目出度しではなく、本質的にキリスト教的なものの遺棄であり、全く世俗化した人間に見出される安全さに過ぎず、それは更に堕落した背教なのだ。」*3 キェルケゴールの晩年の日誌記述を見ると、その思想の深化と共に、世間的尺度と質的に違ったキリスト教的尺度が、際立って表現されるようになる。ここではリアルな信仰の有り様という観点から、若干のことを見ておきたい。引用した文には、苦悩の継続性と共に、キリスト教の信仰が持続するということが言われている。信仰とは、一回的な回心によって、信仰の陸地に到達して、それでおしまいなのではない。むしろ、苦悩や絶望は、その積極的な意義をもって、信仰との弁証法的関係に入る。日誌記述を引用しておきたい。

「一体どれぐらいの人が、現実に神 - 関係をもつに至ると、人生が疲労困憊するものになるかということを理解しているだろうか。完全に習慣的な保証（日常的な安定）が奪われること（大抵の人は、ある年齢に達すると、彼らの成長も終息し、生活も単なる繰り返しになり、そう、ほとんど定期的反復に過ぎなくなるのだが）、ただそのことが起こるのだ、そう、安定の保証が完全に奪われるのだ！その一方で、日常的な畏れとおののきが、毎日毎日、またその日の全ての瞬間、最大の重要性をもつ決断の内へと入り込むのである――正確に言えば、全ての精神の - 実存（enhver Aands-Existents）は、『七万尋の水上』に存在するのだから、こうした畏れとおののきの場に生きることになるのだ」。*4

自己は常に生成しつつある。それは、「自らに関係する関係」だからであり、『死に至る病』で分析展開される種々の絶望状態にあってもそうであり、信仰状態にあっても変わりはない。特に信仰者になると、あたかもどこか陸地に到着し

*3 P. X3 A 186
*4 P. X2 A 494

たように考えるのは、全くの誤解なのである。「七万尋の水上」（paa de “70000 Favne Vand”）はキェルケゴールがよく用いた言葉で、信仰に生きるとは、一人、水上を泳ぐようなものであることを示している。もう一つ、キェルケゴールの日誌記述を取り上げる。

「理念（Ideal）に向かう全てのステップは、後退である。というのも、前進とは、まさしく私が、理念の完成を見出すことに存するからである。――その結果、私は理念からの距離がますます増大することを自覚するのである。人は利己的に理念を愛することが出来ない。というのも、その場合前進は、私が直接的に理念により近づく場合にのみ、私を幸福にするだろうから――確かにある意味において私は、理念が余りに完全でないことを望むのであり、あるいは、その完全性について余りに知ろうとはしないのだ――理念達成がよりよく進むために。本当に理念を愛すること（その結果前進は後退となり、あるいは私がさらに一層完全にその理念の極地を見るが故に、私が前進することは、敬意から後退することを意味するのである）は、それゆえ自分自身を憎むようになることなのだ」。*5

理念あるいはこの上ない理想に向かう時、その前進の一歩一歩において、私は一歩一歩後退せざるを得ない。理想を実現しようという情熱が強ければ強いほど、出来ない自分に気づくことになるのである。ますます理想から遠のく自分が実感される。前進が後退であるという逆説の中に、宗教的実存の道行というものがあるのである。キェルケゴールの『死に至る病』の構造も、こういった逆説的弁証法が、その動力になっている。信仰の前進、深化が、絶望の深化と切り離せないのである。

3　律法と恩寵

キェルケゴールにとって、その全著作活動の最後の、最も力点を置いた思想が恩寵であった。彼の恩寵理解は、自らの血の滲むような体験に支えられている。しかし、彼の恩寵理解は、常に律法との逆説弁証法的関係を保っている。そこには又、ルターへの批判もあり、彼の思想を、単純にプロテスタント的で

*5 P. X3 A 509

あると位置づけることは出来ない。キェルケゴールを読んで、むしろカトリックに改宗した人も出るぐらいである。二つほど、日誌記述を取り上げておきたい。

「恩寵の下では私は、次のような懸念（Bekymring）から解放される、すなわちその極において私を絶望へ齎すに違いなく、律法の要求の最小限さえ、私には全く満たす能力がないという懸念から。しかし要求は依然としてそこにあるのだ。律法の要求は、引き締め（det Strammende）である。確かに弓のつるを引き締めるように引き締めそのものは、動きを作る、しかし人は限界まで（こわれるまで）弓のつるを引き締めることができる。これこそ、まさしく律法が為すことなのだ。しかし律法の要求は壊すことではなく、付加することなのである」。*6

恩寵と律法の徹底した弁証法的関係は、キェルケゴールが常に説くところである。律法の要求は、恩寵のもとにむしろ先鋭化して不変であり、又既存のキリスト教界が教えるように、恩寵のもとに単に和らげられていいものではない。律法の要求は引き締めであり、弓のつるがぎりぎりまで引き締められるように、引き締められねばならない。しかし、その目的は壊すことではなく、真に「恩寵」が到来するためである。もう一つ、日誌記述を引用する。

「自分自身を甘やかし、労を惜しみながら生きることが許され、かくして安易な生活を送ることが許され、――さてそれから人は恩寵によって救われると信じること、これが人間のチエである。しかし、それはキリスト教ではない。キリスト教は次のようなものである。人が、人間的に言って、一人の人間を不幸にするものが実にキリスト教であるということを経験しなければならない時、又、その結果人が頑張り通したことに対して手柄を要求するよう誘惑された時、――その時、自らの罪において、無限に神の前に自らを賤しくし、ただただ人が救われるのは恩寵によるのだということを理解すること、それがキリスト教なのだ。」*7

安易な生活を送りつつ、人は恩寵によって救われるのだと信じること、それは人間的なチエに過ぎない。真のキリスト教とは、人間的な尺度からすれば、

---

*6 P. X2 A 239

*7 P. X3 A 269

実に人間を不幸にするものである。その際、その不幸の内で自ら努力した結果、何らかの見返りを要求したくなった時、そうした見返りなどいささかも考えず、罪の意識をもってひたすら無限に神の前に身を低くし、自分の救済は恩寵によるのだと理解すること、それが真のキリスト者である。

「恩寵は律法の要求をより厳格にする。……恩寵が私に示され、私が刑の執行を猶予されるというまさにその事の内に、それだから一層、要求が私にのしかかるということが起こるのである。……神はキリストにおいて自らを啓示した――しかり、それは神が為しえた究極のことであった。そしてそれ故にこそ、それはある意味で、余りにも安易に受け取られることとなった。しかしながら、まさにその背後に永遠の戦慄すべき真剣さを待機させているのである。正真正銘のキリスト教的命題は、人間は何一つ為し得ない（et Menneske formaaer slet Intet）ということである。――このことはしかし、一切の努力の停止のためのキリスト教の合言葉（Løsen）になったのではないか！」*8

ここでは恩寵が律法をより厳格にすると言われている。恩寵を真剣に受け取る時、私はより純粋な努力へと入っていく。しかし、この努力が純粋であればあるほど、その不完全さを自覚せざるを得ず、更に恩寵を必要とするのであり、そこに恩寵の受取りの深まりが存するのである。キェルケゴールは、キリスト者の完全性とは、自らの不完全性の認知にあると述べており、こうなると、個別な事柄への恩寵ではなく、自らの存在そのものへの無限の恩寵が問題となる。かくして、恩寵の背後には、正真正銘のキリスト教的命題、すなわち、人間は何一つ為し得ないということが置かれているのである。――しかるに、この何一つ為し得ないという命題は、限りなく安易に受け取られ、既存のキリスト教界の堕落へとつながったのである。

4　愛の業

この歴史的現実の真只中で、聖霊は働き続ける。この働きに与る信徒においても、この世界の苦悩は決して無関係では有り得ない。神の愛を感得した人間が、自分だけは苦悩を脱却したから、もう満足したということはありえないこ

*8 P. X3 A 784

とである。では、私において成立する愛や慈悲の有り様はいかなるものであるのか。

「義務となることによって永遠の改造（Forandring）を受け容れた真実の愛は、決して変化しない。その愛は単純であり、ひたすら愛するのみであって決して愛する者を憎むことがない。」*9 永遠による変化、改造に出会った人間とは、キリスト教では信仰へと回心した者に他ならない。この信仰と同時にキリスト者は、「神は愛なり」（ヨハネの手紙1第4章第16節）だから、当然その愛を深く感得する。そして、そこに感得された愛は、最早人間の愛ではなく、神の愛である。こうして、キリスト教的愛は、その永遠の愛の様相を示す。

かくして人間の地平では到底不可能であった愛が、キリスト者において芽吹くのである。しかし、この愛は直ちに人間に成就するわけではない。あくまでも理念として感得されるのであって、一方では、却って愛の不可能性を自覚せざるを得ないのである。前述の、前進は後退という逆説が当てはまる。彼は、マタイ伝第22章第39節「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」に関連して、次の様に述べいる。

「いな、キリスト教はまさにその反対に、私たち人間から自己愛を剥奪するのだ！自己愛とは即ち、人が自分自身を愛するということに他ならない。しかし人は隣人を、『自分を愛するように』愛さねばならぬのであるとするならば、その誡めは、あたかも合鍵を持ってするように、自己愛の錠をこじ開け、それを人間から剥奪するのである。隣人愛の誡めが、『自分を愛するように』という非常に手っ取り早いがしかも永遠の緊張力を持っている言葉によってではなくて、他の仕方で表現せられていたとするならば、その誡めは、自己愛をこのように克服することは為しえなかったであろう」。*10

いわゆる隣人愛の誡めは、実に端的に「自分を愛するように」と述べている。では、人間は、どのように自分を愛しているのか。命懸けで守り、命懸けで愛しているのである。聖書は、この無条件な自己愛と同様に君の隣人を愛せよと、言っているのである。この短いイエスの言葉は、真剣に読む者にとって、ぐさ

---

*9 SV3, 12, S. 39

*10 ibid., S. 23

りと突き刺さる。そして、人間は、決して隣人を愛せないという結論を持たざるを得なくなるのである。さらにこの誡めは、我々が普通「自分を愛する」という時のその愛が真実の愛でないことをも示している。というのも、ひたすら自己保存のために生きている自己愛は、他を愛せない愛であることが白日の下に曝されるからである。では、愛せないということで終わるのであるか。キェルケゴールは、次のようにも述べている。

「君が何一つ為しえず、又何一つ為しえないということを知るのでなければ、全能者は君の、或いは人間の同労者となることは出来ず、これに反して、もし君が彼を同労者として持つならば、君は全てのことを為し得る。」*11

神と共に働くためには、人間は何一つ為し得ないということを知らなければ不可能なのである。しかし、一旦それが実現して、神が私と共に働くなら、私は全てのことを為し得るのである。

* 11 ibid., S. 258